今月のことば　**令和５年（２０２３）８月**　<No.204>

聴聞にきわまる

ある日の夕刻。車でお参りに向かう交差点の信号待ちで、二人組の男の子が下校している姿を目にしました。二人の帰り道はそこで分かれるらしく、「バイバーイ」と手を振っています。

すると、片方の子だけはその場を動かず、ランドセルが揺れるほど一生懸命に手を振りながら、友達が見えなくなるまで「バイバイ」を続けていました。私は、「明日も学校で会えるはずなのになぁ」と不思議に思いながら通り過ぎましたが、後でその子の姿が**「諸行無常しょぎょうむじょう」**という、お釈迦さまの大切な教えそのもののような気がしてきました。

「諸行無常」という教えは、「あらゆるものごとは移り変わる」という意味だけでなく、**「明日もあなたの命があるだろうと当然のことのように考えているなら、それはあなたの思い違いです」**という、厳しい内容を含んでいます。

私が「明日会えるじゃないか」と考えるのは、大人の知恵を備えているからです。しかし、その子は“大人の知恵”による未来の予測ではなく、今の別れを“身体全体で・素直に”味わっていました。

大人の知恵（人間の知恵）がつけばつくほど、仏さまの智慧（真実の智慧）を見えづらくしてしまうことがあります。だからこそ、私たちは仏法を聞き続けなければならないのです。

本願寺第８代宗主・蓮如上人は、それを**「仏法は聴聞にきわまる」**とおっしゃいました。

思えば、如来の慈悲は、頑迷にして固陋（頑固で見聞がせまいこと）、無智にして怠惰な私たちに、倦むことなく（あきらめることなく）常に喚びつづけ、この私の目覚めを絶えず促しておられるのでありました。…

少なくとも信の扉は、私の方から開けるべきものではなく、如来によってすでに開かれてあったことを聞きわけることが大切なことでありました。・・・**聴いて救われるのではなくて、救われるべきは私であったと聞くことの大切さ**を心得べきなのです。

…いかに愚かな所作をくり返す私たちであっても、すでに如来に喚ばれ、如来に照らされ、如来の御手の中にあったと知る人生は、まことに大らかであり、いつも明るいものであるということでありましょう。

聖典セミナー『蓮如上人御一代記聞書』 藤澤量正 著　より

浄土真宗は、**「救われがたき私」が阿弥陀如来のはたらきによって「必ず救われていく」**ことを聴いていく教えです。どうか“大人の知恵”にとらわれず“素直な”気持ちで、阿弥陀さまの智慧と慈悲とに耳を傾けてみてください。

慧日山 真光寺